

鷗外文学と肺病

――結核の比較文化史――

福田 真人

I

鷗外はすでに十九歳で肋（胸）膜炎を経験していた。そして、主治医の額田晉の証言によれば鷗外は極度に悪化した肺病患者であった。それは、痰の検査ではつきりと確認されたことで、かつ問題なのは、鷗外自身が長年肺病であることを隠蔽し続けたことであり、死後も子供達のためにその秘密が守られることを望んだことである。すでに見たように、^{二〇}鷗外が最初の妻登志子を離別した理由に肺病があつたはずであり、それらを考え併せると、鷗外の文学に肺病が色濃くその影を落としていても不思議ではない。鷗外の文学といえるものの中で、肺病が登場する場面はそれ程多くない。しかし、そのどれもが、鷗外の心境や社会の肺病に対するイメージを如実に映しだしているように思われる。

なお文中で「肺病」と「結核」が交互に使われるのは、鷗外の時代の事情を反映してのことであり、根本的には同一の病である。

II

その鷗外が最初に、しかも正面切つて肺病（結核）を扱つたのは戯曲『假面』である。この戯曲は明治四十二年（一九〇九）四月に雑誌『昂』に発表された。^{二一}

この戯曲は、駿河台の自宅で診療所を開いている杉村博士の病室を舞台に、金井夫人、その弟の文科大学生葉が登場する一幕劇である。夫人が実弟の病気を心配して、一足先回りして喀痰検査の結果を聞きに来るところから話は始まる。夫人は葉が結核ではないかと再三博士に問いかけるが、博士は「わたくしの處では、病名は言はない事にしてある」と一旦断る。しかし旧知の間柄であることもあつて、博士は、葉の胸膜炎が快癒していかないこと、また慢性気管支炎であろうことを告げる。ちょうどそこへ本人の葉が入つてきて、姉の存在に驚くが、すぐに事情を了解して本題に入る。葉は、自分の状態を、「咳は實際二時間も三時間も丸で出ない時があるのです。併し夜左の方を下にして寐していると、ぶ

つぶつぶつぶつと云ふのです。丁度水のはいつてゐる小さい管を吹くやうな工合です。それが胸膜炎を遣つたとき、息をするときとざらざらしたのとは違ふのです」と状態を説明する。

葉は、博士から指示された通り「フランネルを遣」り、葉は正確に服用している。フランネルとは、とりわけヨーロッパで推奨されたフランネル（Flannel: 紡毛糸で粗く織つたやわらかい織物のこと）の肌着あるいは寝巻を着用することで、葉とは、たとえばクレオソートやジギタリス、肝油の類であろうか。そして、博士は葉が大学へ行くことには反対しないが、「何でも體に悪い處のある時には精神を疲れさせないのが第一だからなあ」と言つて、とりわけ西洋医学で重要な意味を持つていた肺病心因説の影を窺わせる。もちろん、明治時代以前から日本でも労咳と氣鬱の相關関係は、単に医学者のみならず、広く民衆の間でもよく知られていたことであつた。

そこへ、足場から転落して腹腔内出血を起こした植木職人が担ぎ込まれてくる。その間に、葉は博士の手控を見て、自分が結核であることを知るのである。

ヘフンド、ボシチイフ

Refund positiv. (激したる調子。) 先生。わたくしは結核です。ね。……ああ。死を遂げるなら、一刹那に遂げるのが一番幸福でせう。先生は、悪くなつてゐる處は狭い間だと仰やつ

た。それが段々に廣がつて、一方の肺を破壊してしまひ、更に進んで他の一方の肺を破壊してしまはねば、死なれないのでせう。それには少くとも一年は掛かりませう。

葉の絶望する様に事態の悪さを悟つた博士は、顕微鏡を覗かせる。「細菌が見えるだらう。その絲を刻んでばら蒔いたやうなのが結核菌だ。青い地に菌が赤く出てゐる。Nielsenの法といふので、今は大抵これで染める」と説明して、次に一八九二年十月二十四日付の写真を見せ、それが自分のものであることを告げる。杉村博士は「その頃折々風を引いて痰が出ることはあつたが氣にも留めなかつた。ところが、十月二十四日が月曜日で、二時間続けて講義をして、控所へ歸ると、何だか温い玉が氣管を上へ向けて升つて来るやうな心持がするのだ。そこに顕微鏡に使用硝子の血があつたから、その中へ吐いて見た。すると君、拇指の頭程のの血の塊なのだ。おれも心中随分驚いたよ。兎に角、健康な肺から血が出るといふことは、絶対的にないのだからなあ。それからおれは其血を検査して見やうと思つたが、どうもそれが人に知せたくないのだ。なんだか自分の運命は自分で掌握してゐたいといふやうな心持がしたのだ」と、自分がなぜ仮面を被るに至つたかの心情を吐露する。その宣言にも似た告白は、つまりは、鷗外自身の秘密を守り通した合理的な理由の説明でもあつた。

そして、杉村博士は今まで誰に対しても自分が結核であることを秘密にしていたと言ひ、ドイツの哲学者ニーチェ(Friedrich W. Nietzsche, 1844—1900)によつて書かれた『善悪の彼岸』(Urnachs von Gut und Böse, 1886)の中の仮面という言葉を採用しながら、「家畜の群れの凡俗を離れて、意志を強くして、貴族的に、高尚に、寂しい高い處に身を置きたいといふのだ。その高尚な人物は假面を被つている」と述べ、葉にも他人には結核であることの秘密を告げないと約束させる。葉は、大学にさえ行くと云う。博士は、「おれの知識の限を盡して、君の病氣が周圍に危険を及ぼさないやうにして、(間)そして君の病氣を直して遣る」と言ひ、また「Nagelは殆どあらゆる死體に、結核の古い痕を認めないことはない」と報告している」と教えて、葉を納得させるのである。

この戯曲の第一の特徴は、登場人物がドイツ帰りの医学者とその周辺の人達で、まず当時のエリート達の物語と言つてよいこと、第二に、鷗外の結核に対する態度が英雄主義的であり、この病の社会性の認識に欠けるという問題である。つまり、他人に対して結核を感染させる可能性を持った結核菌保菌者が、群衆に対して孤高の態度を取り続けることを是とし、賛美を呈することは、無自覚性開放結核患者を野に放つておく危険性に対する無神経さを際立たせてしまうのである。演奏会でシヨパンがあると言へば、葉が行くことに博士は反対をしない。杉村博士が「おれなんぞ

は病氣を発見したのが、十七年前の十月で、十二月からはいくら検査しても negativ だったが、もう少し、もう少しと思つてゐる中に、ついつい無妻で通すやうになつた」状態も、それが結核のためだけであつたにせよそうでなかつたにせよ、十年余り再婚せず無妻で通した鷗外自身の姿が反映されているようである。實際鷗外は、重い職責に耐えながら、文学的活動およびその他諸々の活動に、倦むことなく精力的に参加しているのである。つまり「假面」は、鷗外が被つていた自分自身が結核であることを隠すための假面が、世間に対する保身のためのものであつたという告白であり、また同時に、選ばれた人が当然被るべくして被つた仮面であつたという、一種不遜とも思われる假面への擁護であつた。鷗外にとつて、結核(肺病)とは家族にさえ秘密にすべき種類の、重大な病だつたのである。

『假面』を書いた年の七月、同じ雑誌『昴』に鷗外は『キタ・セクスアリス』を発表している。この一編のためにこの号の『昴』は発禁処分にあうのだが、鷗外の分身である金井君は、鷗外の日記や手紙でも不明な青春時代の彷徨と、ドイツ滞り時代の様子を知らせてくれている。その中でも興味深いのは、二度目の吉原通いの際のことである。三枝という男と女郎屋にあがると、「色の眞蒼な、人の好ささうな年増」が入つてくる。

「お前はひどく血色が悪いではないか。どうしたのかい。」

「ええ。胸膜炎で二三日前まで病院にゐましたの。」

「さうかい。それでゐて、客の處へ出るのはつらからうなあ。」

金井君は最初から女と腕角力でもするつもりなので問題はないが、娼婦たちの履歴が問題であった。「女工哀史」でみられたように、あるいは貧農から紡績女工として働きに出て、やがて病を得、しかたなく都会の苦界に身を沈めた女たちが、また最初から待合や女郎屋に身売りされてそこで病に感染した女たちがいたので、そうした酌婦や女郎に接した男たちから徐々に肺病（結核）が広がっていったことも、明治・大正期の肺病蔓延に少なからず拍車をかけたのであろう。

一方ドイツでは、ライプツィヒの娼婦館で女の客引きに掴まりそうになると、金井君は「己は肺病だぞ、傍に来るとうつるぞ」と叫んでいる。肺病が恐ろしい病気であったために、寄ってくる娼婦を撃退するのに役立ったのであろうが、そう叫んでいる「鷗外」はまた、自分のかつての、しかも今なお秘密にして「仮面」を被っている病を想起していたのではあるまいか。また、『仮面』の杉村博士は独身を通してのだが、金井君は「西洋から歸ったのは二十五の年の秋であった。すぐに貰った初の細君は長男を生んで亡くなった。それから暫く一人であつて、三十二年の年に十七

になる今の細君を迎へ」^五ている。実際には、鷗外は二十七歳で帰国し、二十八歳で結婚した相手は十年後に亡くなり、四十一歳で二十三歳の妻と再婚している。つまり『仮面』で杉村博士に独身を装い続けさせたのとは違って、『キタ・セクスアリス』の中では、いくらか一般の人々になじみやすい年齢構成に粉飾されて鷗外の実生活が描写されていると考えてよいのであろう。

鷗外がその才能を高く評価しながら、なかなか逢うことの叶わなかったのが二葉亭四迷長谷川辰之助（一八六四—一九〇九）である。その訃報に接して書かれたのが、『仮面』と『キタ・セクスアリス』と同じ年の明治四十二年の八月に発表された『長谷川辰之助』である。

ある日役所からの引き掛に、須田町で、電車の憲へ賣りに来る報知新聞の夕刊を買つて見た。その夕刊の一面に長谷川辰之助の事が二段ばかり書いてある。西洋で肺結核になられて、いよく歸郷せられるといふことである。

私はそれを讀んで、外の事は見ずに、新聞を置いて、いろいろな事を考えながら歸えつた。容態が好くないから歸られるのだとは書いてあつた。併し兎に角、印度洋を渡つての大旅行を敢へてせられるのだから、存外悪性ではないのだらうとも思つて見た。結核菌の證明せられた肺尖加答兒の人でもすつかり快復

して長生をする人もあるなどといふことを思つた。

ある日新小説が来た。小山内薫君の途中といふ小説が出てゐた。此頃ちよい／＼人の小説を読むやうになつてゐるので、ふとそれを讀み出した。途中の主人公も洋行する。露西亞にゐて肺結核になる。事實に據つたらしい小説で、長谷川辰之助君とは年代の關係が違うが、その經歷の順序が似てゐる。私は始終長谷川辰之助君の事を思ひながら讀んだ。

途中の主人公は、肺結核になつて露西亞から歸つても、その後何年か生きてゐて死んだ。長谷川辰之助君はとうとう故郷に歸り著かずに、却つて途中で亡くなられた。^(二六)

ここから鷗外の想像が少し脹らんで、二葉亭四迷の思い出の記であるはずが、いつのまにか、小説の如き様相を呈するようになる。ペンガル湾で、死を前にした二葉亭四迷が苦しむ病は、無論、肺病である。しかし、この短いなげなく読み飛ばしてしまひそうな鷗外の文に、おそらくその年の頭から鷗外の氣に掛かつていたであろう肺病の記述がひどく多いことに氣づく。この短い引用の中に「肺結核」という言葉が三回、他にも「結核菌」と「肺尖加答兒」が登場している。その上、「假面」の杉村博士のように、鷗外は「結核菌の證明せられた肺尖加答兒の人にもすつかり快復して長生をする人もあるなどといふことを思う」のである。鷗外

はまさにその実例であつた。それ故に、胸膜炎を患ひ、やがて結核症を一生養生しながら秘密のうちに持つていた鷗外にとつて、肺病を發症し、帰国の途次に洋上で逝去した二葉亭四迷の運命は他人事とは思えなかつたのであろう。たしかに明治四十二年は、「假面」、「キタ・セクスアリス」、「長谷川辰之助」と連続的に肺病が露に鷗外の筆にのつた年であつた。しかし、鷗外はついに、その「肺病」という事實を自分の小説の世界に閉じこめて決して口外することはなかつたのである。

鷗外は、「假面」發表の三年後、ドイツの作家シュニッツラア (Arthur Schnitzler, 1862—1931) の作品『みれん』(Sierben, 1894) の翻訳を『東京日日新聞』(明治四十五年一月六日—三月十日) に連載している。

この物語の中心人物は、結核を患つた青年フェリクスとその恋人マリイで、初めは青年が結核で死んだら自分も一緒に死ぬといつていた女が、男の病が長引くにつれ最初の情熱的な恋心もだんだん醒めてきて、看護にも飽き、また、自分の輝かしい生に氣付いたせいもあつて、ついに男を捨てて去っていくという物語である。病のために衰弱がひどくなった青年は、一人で死ぬことの恐怖から、女の首を絞めて自分も一緒に死のうとするのだが、女はそれを振り払つて逃げ出し、とうとう男は孤独に窓辺に倒れ付してこと切れるのである。鷗外は自ら筆を執つて草した「みれん廣

告文」にこう書いた。

肺患に罹りたる夫フェリックスと強壯にして貞淑なるその妻マリイと、夫婦間の愛の徑路變遷を描き、深く人間心理の機微に徹す。事件は即吾人の日常度目賭するところに類し、心の懊惱は即吾人の日常親しく苦しめられる、ところのものに似たり。

この小説では、男女の心理の機微が、肺病の病勢を絡ませながら描かれているが、そこには社会病、国民病としての性格を帯びるに至った肺病の恐ろしい現実の描写が皆無に近い。その意味で、結核患者に妙な英雄主義を鼓舞するところのあった『假面』と軌を一にしていると言つてよいだろう。小説が社会の生活苦や病苦をその題材に取り上げなければならぬという謂れはないが、いわば生活の労苦を切り捨て、その上澄みだけを掬い上げたこの戯曲と翻訳小説は、同時代の人々の肺病に対する意識や態度に、ある種の影響力を持ち得たに違いない。あるいはすでに廣津柳浪の『殘菊』や徳富蘆花の『不如歸』によつて醸成されていた肺病に対する独特の甘く美しいイメージが、鷗外をこうした創作や訳業へと駆り立てたのかもしれない。

訳業『みれん』が発表された年の八月（元号は大正元年）、鷗外は『中央公論』に『羽鳥千尋』を掲載している。その小説の書

出しに見られるように、羽鳥千尋は実在の人物であるらしい。貧困と病のために大学進学を諦め、医術開業試験を受けようと思ひ立つて独学をし、どうにか前期・後期の学術試験には合格し、残すは実地試験のみとなったのである。そこで羽鳥は鷗外に手紙を出し、田舎では実地試験の準備ができないので、鷗外の家で書生として置いてくれるよう懇願するのである。たまたまある役所に欠員があつたのでそこに入れてやることにする。尋ねてきた羽鳥は、「背の高い、只見たばかりでは病身らしくもない男である。細面で鼻が高く、目が大きい」二十二歳の男である。彼は、「細菌学を應用した製造」の職務についているのだが、「併し體には容易ならぬ病気があるらしい。役所は醫者ばかりの勤めている所なので、診察を受けさせた。病は脊椎にある。結核性のものだろうと云ふことである」。こうして役所に二年勤めたのち、羽鳥は結核の重症に陥る。病気を自覚して五年目、医師をめざしてから四年目のことであつた。

羽鳥の父も軍医であつたが、台湾で作戦行動中に病気で死んでいる。羽鳥は、ものに敏感で、また高山樗牛の天才主義に深く傾倒し、廢墟、埃土、壁画、芸術などといった言葉を愛したのである。「天才を與へよ、然らずば死を與へよ」というように、幼少から優等生でなかつた事がない。酒も、煙草も、賭事も嫌いである。しかし、十九の時に病を發して、外科手術のために、担架に

載せられていく。羽鳥は、一句を吟ずる。

生きてゐるぞ擔架の上の秋の我

担架の上で赤酒（ワイン）、鶏卵、ミルクなどを飲み、病院へ向かった。羽鳥はその後も医者になるためにさまざまな道を考えてたが、結局鷗外に手紙を出して書生として置いてくれることを請うのである。そして、その志は成就しないで終わる。その上、「羽鳥と同じやうな手紙を己によこして、同じ役所の雇員になつて、去年肺結核で死んだ大塚壽助と云ふ男がある。甲山と云ふ名で俳句を作つて、多少人にも知られてゐた。世間にはなんと云ふ不幸な人の多いことだろう」というように、若くして十分才を發揮しないまま亡くなる人が多かつたのである。

羽鳥の手紙の日付は「明治四十三年七月二十一日」になつてゐる。鷗外の日記には、この手紙に関する受信、発信の記録はないが、同年八月十九日（金）の項に「羽鳥千尋來て宿る」、二十日（土）に「羽鳥千尋を軍醫學校に遣る」、二十四日（水）「羽鳥千尋自炊下宿に移る」の記述が見られる。それからしばらく、記録は途絶える。次に鷗外の日記に羽鳥が登場するのは、明治四十五年六月十九日である。「六月十九日（水）。晴。服部千尋危篤なるを聞き、石田吉治を派遣す」。羽鳥のことを忘れていたのか、そ

れとも驚愕のあまり漢字を間違えたのか、とにかくここでは「服部」となっている。そして、七月十七日（水）の項では「羽鳥千尋を稿し畢る」となっている。羽鳥はこの約一カ月間の間に亡くなつたのであろう。それではここで羽鳥の死が持つていた意味を、それからほんの二週間後以降の鷗外の行動を追いながら考えてみよう。鷗外の日記を引く。（抄）

七月三十日（火）。晴。薄き白雲。午前零時四十三分天皇崩ぜさせ給ふ。（以下略）

三十一日（水）。晴。薄き白雲。・・・（中略）・・・羽鳥千尋を載せたる中央公論を羽鳥の遺族に送る。

八月三日（土）。半陰。朝大雨過ぐ。高濱清の葉書至る。羽鳥千尋を読みたりとなり句を添へたり

雲の峰に響きてかへる午砲かな 虚子
九月十三日（金）。晴。輜車に扈随して宮城より青山に至る。午後八時宮城を發し、十一時青山に至る。翌日午前二時青山を出でて歸る。途上乃木希典の妻の死を説くものあり。予半信半疑す。

十四日（土）。陰。乃木の邸を訪ふ。

十五日（日）。雨。午後乃木の納棺式に蒞む。

十八日（水）。半晴。午後乃木大將希典の葬を送りて青山齋

場に至る。興津彌五衛門を舁して中央公論に寄す。

羽鳥千尋の危篤を知ってからの鷗外の三ヶ月間の行動は興味深い。まず知り合いの医師を羽鳥のもとへすぐ派遣したのはさておき、天皇崩御の翌日、『羽鳥千尋』の掲載された雑誌を直ちに羽鳥の遺族に贈呈していること、三日後には、高濱虚子が読了との知らせを寄越していることなど、肅然とした悲しみのなかにも、私的かつ日常的行動が、羽鳥に関する行動と共に整然と進行しているさまが窺える。そして、かなり親しく交わっていた乃木將軍の自決に至ると、さまざまな思いが去来してか、一気呵成に『興津彌五衛門の遺書』を書き上げるのである。

『興津彌五衛門の遺書』と同じ事が『羽鳥千尋』に起こっていたのではなからうか。つまり、鷗外は、貧しく病にも冒された前途有望の青年が、志半ばにして倒れる様を、なにかいたたまれない心持で見ているのではないかということである。それゆえに、乃木將軍の死に際して衝撃のあまり急ぎ筆を執ったように、羽鳥の死に際しても鷗外は急ぎ筆を執ったのであろう。また羽鳥が、春秋に満ちた青春を、世間の喧騒とは別に静かに閉じたことに対する深い同情があったからこそ、天皇崩御の翌日にもかかわらず羽鳥の遺族に『羽鳥千尋』を掲載した雑誌を送付しなかったので

あろう。二人の交遊は、おそらくは羽鳥の手紙に示された勤勉さと病の説明に始まり、その報われない病による死で終わった。その死は結核による死であり、それはかつて大学卒業の年に肋膜炎を患って以来、結核の恐怖に捉われながら「假面」を被り続けた鷗外自身にもいつ襲ってくるか知れなかった運命であった。

それゆえ、結核およびその同種の病名がとりわけ明確に鷗外の日記に見られるのは、故なき事ではないのかも知れない。たとえば、羽鳥が東京に出てきたばかりの明治四十三年九月の鷗外の日記を見てみよう。

九月一日(木)。半晴。山縣公有朋軽き胸膜炎に罹らせ給ふをもて椿山莊へ見まひにゆく。

七日(水)。石本新六の肺結核稍や進む。

肺病とは明記されていないが、おそらく『高瀬舟』(大正五年『中央公論』一月号)における弟の病氣は勞咳(癆瘵、肺病)であったと思われる。この小説のテーマは、作者自身が『高瀬舟縁起』に書いている通り、財産の観念とユウタナジイ(安楽死)であるが、自殺を試みて血に染まった弟を見て主人公喜助が「どうしたのだい、血を吐いたのかい」と尋ねている所、また弟が病気で長寝している所から、鷗外は慢性疾患の勞咳を想定していたと

考えてよいだろう。鷗外は、喜助に弟の自殺による流血を勞咳による咯血と誤認させることによって、一層血の意味を重くさせたのではなかったのだろうか。つまり、勞咳の長患いに苦しんでいた弟はいつ何時咯血をしてもおかしくなかったのであり、また腕か喉元を切つて自殺を図つた弟は、おそらくは出血多量のためにもう朦朧としていたのである。それは、どのみち死に至る血を暗示しているからである。

III

医学者であると同時に作家でもあつた鷗外が、結核をどのように取り扱つたかは、ほぼ以上の検討で明らかになつたであろう。『假面』においては、結核が伝染病であり、とりわけ注意が必要であるにもかかわらず、生涯にわたつて英雄的にその病を隠し続けることを主張する鷗外。そこには、鷗外自身の苦しい現実が隠されていたにせよ、かつてひとに先んじて痰壺を唱導した、その同じ人の言葉とは信じがたいところがある。また、すでに社会を覆い始めていた結核のロマン化の色濃い影響も見られる。そこに、鷗外は結核の社会性の認識に乏しかったという批判も生じてくるのである。『みれん』の訳業も、創作とは言えないまでも、そうした結核のロマン化に多かれ少なかれ加担したことには疑いが

ないだろう。しかし、『キタ・セクスアリス』の中で垣間見せた、生身の鷗外は、もつと深刻に結核を捉えていたように思われる。

それは「己は肺病だぞ、傍に来るとうつるぞ」と叫んでいる「金井君」ではなく、長男を生んですぐ亡くなる細君の記述に表れている。つまり『假面』の中で、自身が結核である事を発見し無妻で通す杉村博士が、その他の点では鷗外の姿をよく映しているのに、まさに無妻という点で戯曲の中の虚構の人であつたのに比して、妻を結核（あるいは、産褥熱）で亡くす「金井君」は、まさに鷗外その人なのである。つまり、鷗外は、『假面』の嘘を『キタ・セクスアリス』で償つたといつてよいのであろう。

しかし、鷗外は『假面』の杉村博士のように頑固であつた。彼は生涯医者に自分の身体を見せるのを拒み続けた。鷗外が、二十歳で肋膜炎を患つてから以降ずっと結核性の疾患を持ち続けていたことは、死の年大正十一年の手紙に初めて詳しく書き記されている。（五月二十六日、賀古鶴所宛）

卒業ノ年 胃膜炎 ヤツタアトデ寒ゴトニチク／＼イタムソレ
ガ時々 Sputum ヲ出ス 氣管支炎ニナル 近年ハマレニ Asthma ヲ
シイ 咳嗽ニナルコトモアル 腎ニモ何物カガアルドラウ・・・
（中略）・・・コレマデ何物カガアツタノガ一變シテハツキリ
何々ガ何ノ程度ニアルトナル 假ニ醫者ハエライトスル間違ハナ

修養デハナイ生死ノ問題モタシヨウ考ヘテキル又全然無經驗デ
モナイ死ヲ決シタコトモアルシカシ内部ノキタナラシイモノト
其作用ノススム速度トヲ知ツタラ之ヲ知ラヌト同ジヤウニ平氣
デハキラレマイ即チ精神状態ノワルクナルコトハ明デアル・・・
(中略)・・・ココニドンナ名醫ニモ見テモラハナイト云結論
ガ生ズル^(一〇)

この時健康の衰退が著しく、家人および友人賀古鶴所が医者に
診察してもらうことをさかんに勧めたが、鷗外は頑として拒み続
けた。鷗外には拒み続ける理由があつたのである。それはやつと
鷗外が診察を許した額田督博士が、鷗外の長男森於菟に語つたこ
ころを聞けばよい。

その尿には相当に進んだ萎縮腎の徴候が歴然とあつたが、そ
れよりも驚いたのは喀痰で、顕微鏡で調べてみると結核菌が一
ぱい、まるでその純培養を見るようであつた。鷗外さんはその
とき、これで君に皆わかつたと思うがこのことだけは人に言っ
てくれるな子供もまた小さいからと頼まれた。・・・(中略)・・・
よほど前から痰を吐いた紙を集めて、鷗外さんが自分で庭の隅
へ行つて焼いていたと言われたから、奥さんは察していられた

鷗外は、まさに自覚開放性結核患者であつた。かつて結核予防
法に熱心であつた時に、おそらくは時代に先駆けて卓見であつた
「喀痰の処理」を終生守り通して死んだこと、また結核であるこ
とを隠し続けるために「假面」を被り、決してそれを脱がなかつ
たことは記憶されてよい。このことは、鷗外の中で、公人と私人、
あるいは軍医と家父長という二つの立場が相剋していたことを示
している。

しかし、軍務であるにせよ、たとえば観潮楼での歌会にせよ、
鷗外が数多くの会合や宴会に出席して、談笑し、酒を酌み交わす
様を想像するだに慄然とせざるをえない。しかし鷗外が、子供達
のために秘密が守られることを願つたことは理解できなくもない。
鷗外が功なり名を遂げた人士であつたとしても、肺結核である事
が知れたることは、ただちに娘たちの嫁入り先に困難をきたす
ことになりかねなかつたからである。それゆえ、鷗外が執つた態
度、つまり「假面」を被り続けることは、ちようどかつて「家」
のために「エリス」をドイツへ送り返した態度と似てはいはしない
だろうか。帝国陸軍史七十五年の中で外国人の妻を娶つた例はた
だ一つ切りで、二人が結婚することは直ちに特別の目を持って遇
せられることを意味したし、それは結核と同様に、社会的差別・

排斥を受けることをも意味したからである。

かつて明治十八年（一八八五）ドイツにあつて、鷗外はアメリカ人の友人トーマスとの会話を『獨逸日記』にこう記した。（八月二日）

トオマス Thomas は性質溫和にして、言辭虚飾なし。余其人と爲りを愛す。談偶々婚に及ぶ。トオマス Thomas 悽然として云く。余は終身娶婦の望を絶てりと。余其故を問ふ。曰く、我家は世々癆瘵を病みて死す。余復た患を子孫に及ぼすに忍びず。而して故里一少女あり。望を余に屬す。雁書往復、今に至りて止まず。余措いて答へざらんことを欲すれども能はずと。困りて其小照を出して示す。余其意を憐み、慰めて曰く。今コッホ Robert Koch 結核菌の發明あり。人傳屍鬼瘴の妄を辯ず。君の身今健全なり。宜く強壯なる婦を娶りて強壯なる兒を育す可しと。^(一五)

結核菌が発見されて三年目のこの年、ある家系における癆瘵^{ろうざい}（肺病、肺結核）の遺伝説はなお根強かつたようである。この病ゆえに終生独身を通そうとする友人に、鷗外が「傳屍鬼瘴の妄」を論じ、強壯な妻と共に強壯な子を育てようと論ずるは、奇しくもそれ以後の彼の生活と一致する。自らの結核を案じながら、

強壯でなかつた最初の妻を離別したことも、すでにこの辺りに發想の原点があつたのかも知れない。そして、無妻で自らの結核であることを秘して孤高に生きる「假面」の杉村博士には、アメリカ人トーマスと鷗外自身が投影され、おそらくは脳梅毒の症状を呈しながら死んでいったニーチェの超人思想が加味されて、独特の、いささか非社会的な人物像が出来上がったのであろう。それが結核のロマン化に加担したにせよ、しなかつたにせよ、鷗外の日記もまたその作品も、結核に与えられたその時代の意味やイメージのある一側面を鮮やかに示してみせたことには変わりはない。そして、鷗外の中では、結核はあまりに身近過ぎる問題であつたために、結局、自分の「假面」を暗に示したこと、および「羽鳥千尋」というむしろ人口に膾炙することのなかつた作品に対する打ち込み方によって、自分なりの結核に対する決着をつけたのかもしれない。

〈註〉

- (一) 拙稿「肺病・コッホ・鷗外」、『言語文化論集』名古屋大学、第Ⅵ巻第一号、五五―七七頁、一九九〇年
- (二) 「假面」に関しては、鷗外の日記に次のような記述がある。

明治四十二年三月十三日、「脚本假面を書き畢る」

三月三十日、「假面を校し畢る」

〔「鷗外全集」三五卷、四三三―四三五頁。以下、「全集」と表記〕
「假面」の初演は、その年、伊井一座によって新富座でおこなわれた。

(三) 喀痰検査。当時、もつとも有効な結核の検査法だった。一八九五年発明のレントゲン線装置は、すぐ翌年の明治二十九年（一八九六）に日本にも輸入されたが、それから十年以上たった明治四十一年（一九〇八）の時点でも、東大では青山（胤道）内科に一台ある限りで、初期結核は喀痰検査に頼るしかない状態だった。

(四) 〔全集〕四卷、五〇六―五〇七頁。

(五) 同前、四九九頁。

(六) 結核菌の染色法。Franz Ziehl (1857-1926) はコッホが用いたアニリンのかわりに石炭酸を使用。K. Adolf Neelsen (1854-1894) は硫酸フクシンで加温染色、硫酸塩で脱色する方法を用いた。

(七) 森於菟は、この日が鷗外が最初の妻を去って満二年なので、何らかの明確な意味があったと考えている。（森於菟「鷗外の健康と死」、『医学者の手帳』三〇七頁。）想像を逞しくすれば、鷗外は自分の喀痰検査をして病状を把握していたが、さらに妻についても同様の検査を行い、その結果、性格不一致等も斟酌して離婚に踏み切ったように思われるが、如何なものであろうか。検査とは、もちろん顕微鏡によるものであろう。鷗外が、顕微鏡を使うことで自分の健康管理をしていたことは、たとえば、大正六年三月二十六日付の日記を見よ。「余明治三十八年知右眼弱視。而不以告人。是日窺顕微鏡。知其全治也。」於菟によれば、これは中心性網膜炎である可能性が

あり、現在ではその原因は結核性アレルギーと考えられている。

また、登志子の病状についてある程度把握していたことは、母親峰子宛の手紙の中に読み取れる。明治三十三年二月の日不詳の手紙を参照。「赤松のおとしさん病氣にて親元に歸り居候處去一月二十八日死去候由に候先年自分は病氣あれば行先は長からずと申候」

離別した登志子について、鷗外がその後の事情について全く無感動であったわけではないことを付け加えておこう。それには、明治三十三年二月四日の「小倉日記」を見ればよい。「宮崎（下）道三郎妻登志子儀、病氣療養之爲、遠州見付村赤松則良方に滞在罷在候處、養生不相協、去二十八日午後十二時死去仕候間、生前御懇命を蒙り候、各位へ御報仕候。……（中略）……嗚呼是れ我が舊妻なり。於菟の母なり。赤松登志子は、眉目妍好ならずと雖、色白く丈高き女子なりき。……（中略）……同棲一年の後、故ありて離別す。」

(八) 〔全集〕四卷、五〇一頁。

(九) 同前、五〇二頁。

(一〇) Nagel (1871-1936) スイス人。

「然れども病理学者をして言はしむればボルリンゲル氏の如きは屍體解剖上其七〇乃至八〇%には結核病の痕跡を認めざるはなしとし、更に一層甚しきはネーグリー氏の説にして氏の所見によれば成人の屍體に在っては局所的結核の既存せし痕跡なきは殆んど稀にして九〇%以上なりと明言せり。」（氏原佐蔵「結核と社会問題」一六五―六六頁。）

(一一) 無自覚とは、活動性の病変があり、治療が必要でありながら、それに気付いていない場合を言う。重症患者、シューブ (schub) 急

激な悪化)を起こした時、胸膜炎(肋膜炎)を併発した時以外は、症状が無いかあるいは少ないため、結核を発病していても気付かないことが多い。昭和四十八年の調査でも、活動性肺結核患者の六六%、感染性肺結核患者の五六%が無自覚であった。

開放結核患者は、開放性患者、感染性患者で、排菌陽性患者の意味。排菌陰性が十二ヵ月以上続いている時は、たとえ空洞があっても非感染性としてよい。(「結核豆事典」三六、一二九頁。)

(一一) 『全集』四卷、五〇五頁。

(一二) 同前、五卷、一七二頁。

(一三) 同前、一七六頁。

(一四) 同前、一七七頁。

(一五) 同前、二六卷、三四八―三四九頁。

(一六) 同前、三三卷、二五九頁。

(一七) 同前、十卷、五二二頁。羽鳥千尋が鷗外に宛てた手紙の原文全文

が「羽鳥千尋手束」として「鷗外全集月報」第一〇、一一号(昭和

四七年八月、九月、岩波書店)に掲載されている。

(一九) 同前、三五卷、以下四九六―五九九頁。

(二〇) 同前、四九七頁。

(二一) 同前、一六卷、一三三二頁。

(二二) 同前、三六卷、六三一―六三二頁。

(二三) 森於菟、前掲書、三〇二頁。

(二四) 加藤周一、ライシュ、リフトン共著(矢鳥翠訳)「日本人の死生

観」(上) 一二四頁。

(二五) 『全集』三五卷、「獨逸日記」一〇〇―一〇一頁。